

基礎研修 第13回：安全管理とリスクマネジメント

1. はじめに：「安全」と「挑戦」を両立させる専門性

基礎研修第13回のテーマは「安全管理とリスクマネジメント」です。

子どもの発達には、適度な挑戦（チャレンジ）が不可欠です。少し高いところに登ってみる、新しい遊具で遊んでみる。そうした経験が、子どもの心と体を成長させます。私たちの役割は、子どもを無菌室のような無リスクな環境に閉じ込めてはなりません。子どもたちが「安心して挑戦できる環境」を、専門的な知識と技術に基づいて意図的に構築することです。

リスクマネジメントとは、運や偶然に頼るのではなく、起こりうる危険を予測し、備え、組織的に管理するための、私たち専門職に必須のスキルです。この研修では、子どもの安全を「文化」として根付かせるための、具体的な考え方と手法を学びます。

2. リスクマネジメントの基本サイクル

リスクマネジメントとは、単に「気をつける」といった精神論ではなく、以下の4つのステップからなる継続的なプロセスです。

[① リスクの発見] → [② リスクの分析・評価] → [③ リスクへの対策] → [④ 対策の共有・見直し]

- ① リスクの発見（ハザードの特定）
施設内外の物理的な環境（遊具、設備、死角など）や、人的な要因（職員の配置、子どもの発達段階など）に、どのような危険（ハザード）が潜んでいるかを洗い出します。
- ② リスクの分析・評価
発見したリスクが、どのくらいの頻度で起こりうるか、そして、もし起きた場合にどのくらいの重大な結果に繋がるかを分析・評価し、対策の優先順位をつけます。
- ③ リスクへの対策
リスクのレベルに応じて、具体的な対策を講じます。
 - リスクの除去：壊れた遊具を撤去するなど、危険そのものを取り除く。
 - リスクの低減：滑りやすい床にマットを敷く、家具の角にクッション材をつけるなど、危険の程度を下げる。
 - リスクの移転：保険に加入するなど、リスクを外部に分散する。
 - リスクの保有（受容）：擦り傷など、発達上許容できる軽微なリスクは、対策を講じた上で受け入れる。

【重要】挑戦を奪わないバランス感覚

全ての危険を取り除くことが、必ずしも良い支援とは限りません。例えば、園庭の緩やかな坂。転ぶリスクはありますが、それを乗り越えることで、子どもの足腰やバランス感覚は育ちます。私たちは、「排除すべき許容できないリスク」と「発達のために必要な許容できるリスク（チャレンジ）」を、専門職として見極める必要があります。

3. 特に注意すべきリスク：SIDS（乳幼児突然死症候群）の予防

SIDS（シッズ）とは、それまでの健康状態や既往歴から全く予測できない、元気な赤ちゃんが主に睡眠中に突然亡くなってしまう病気です。原因はまだ分かっていませんが、以下のポイントで発症のリ

スクを低減できることが研究でわかっています。

- ① あおむけで寝かせる
うつぶせ寝があおむけ寝に比べてSIDSの発症率が高いことが報告されています。安全のため、必ずあおむけで寝かせるようにします。
- ② たばこをやめる
両親が喫煙する場合、SIDSの発症率が高くなるというデータがあります。妊婦自身の禁煙はもちろん、ご家族や周りの人の協力も不可欠です。

これらに加え、施設として最も重要なことは「睡眠中の呼吸チェック」です。窒息などの事故を防ぐため、睡眠中の子どもの顔色や呼吸の状態を定期的(5~10分に一度など)に確認する体制を徹底します。

4. 事故の芽を摘む「ヒヤリハット報告」

ヒヤリハットとは、「ヒヤリとした」「ハッとした」出来事、つまり「重大な事故には至らなかつたものの、一歩間違えば事故になっていた事例」のことです。

- ハインリッヒの法則(1:29:300の法則)
労働災害の分析から導き出された法則で、「1件の重大な事故の背景には、29件の軽微な事故と、300件のヒヤリハットが隠れている」とされています。この法則は、300件のヒヤリハットという「事故の芽」の段階で対策を講じることが、重大事故の防止に最も効果的であることを示しています。
 - ヒヤリハット報告は「宝の山」
ヒヤリハット報告は、決して「失敗報告」や「反省文」ではありません。それは、職場の安全性を高めるための、極めて価値のある「情報提供」であり「宝の山」です。報告があった際には、「報告してくれてありがとう」と感謝し、個人を責めるのではなく、原因を組織の問題として捉え、再発防止策をチームで考える「安全文化」を醸成することが重要です。
-

5. 「危険を予知する目」を養う: 危険予知トレーニング(KYT)

危険予知トレーニング(KYT)とは、職場のイラストなどを用いて、そこに潜む危険とその原因について話し合い、安全な行動を確認し合う訓練です。これにより、職員一人ひとりの「危険を予知する感受性」を高めることができます。

- KYT 4ラウンド法
 - 第1ラウンド(現状把握): どんな状況か?
 - 第2ラウンド(本質追究): どんな危険が潜んでいるか?(危険のポイント探し)
 - 第3ラウンド(対策樹立): あなたならどうするか?
 - 第4ラウンド(目標設定): 私たちは、こうしよう。(チームの行動目標)

【KYT 4ラウンド法の具体例】

[設定場面:室内での自由遊びのイラスト]

- 数人の子どもたちがブロックやお絵描きで遊んでいる。
- 部屋の隅では、男の子が棚の一番上の段にあるおもちゃを取ろうと、椅子の上に立って背伸びをしている。
- 床にはミニカーが転がっている。
- 職員は、お絵描きをしている子どものそばにいる。

第1ラウンド(現状把握):どんな状況か?

- 「室内で自由遊びをしています」
- 「子どもたちはそれぞれ好きな遊びに集中しています」
- 「職員は一人で、お絵描きの対応をしています」

第2ラウンド(本質追究):どんな危険が潜んでいるか?

- 「椅子から落ちて、頭を打つかもしれない」
- 「棚の上のおもちゃが、椅子ごとバランスを崩して全部落ちてくるかもしれない」
- 「床のミニカーに気づかず、他の子や職員が踏んで転ぶかもしれない」
- 「職員がお絵描きの子に集中しているため、椅子に登っている子への発見が遅れるかもしれない」

第3ラウンド(対策樹立):あなたならどうするか?

- (椅子の子に対して)「すぐに駆け寄り、『危ないよ、椅子から降りようね。上のおもちゃは先生が取ってあげるからね』と声をかけて降ろす」
- (床のミニカーに対して)「気づいた人がすぐに拾い、おもちゃ箱に片付けることをルールにする」
- (環境設定に対して)「子どもの手が届かない高い棚には、そもそもおもちゃを置かないようにする」
- (職員の配置に対して)「室内全体を見渡せる位置に立つように意識する。職員が複数いる場合は、役割分担(一点に集中する人、全体を見る人)を明確にする」

第4ラウンド(目標設定):私たちは、こうしよう。(チームの行動目標)

- 「自由遊びの前には、必ず床や棚の上を指さし確認し、『床よし！ 棚よし！』と安全確認してから始める」
- 「職員は、常に部屋全体を見渡せる位置取りを意識する」

6. 万が一の時、冷静に行動するために:事故発生時の対応

どれだけ万全の対策を講じても、事故の発生をゼロにすることはできません。万が一事故が発生した際に、パニックにならず、冷静かつ迅速に行動するために、対応フローを全職員が共有しておく必要があります。

- 第1優先:子どもの安全確保と救護
 - 被災した子どもの安全確保
 - 応急手当

- 応援要請と役割分担
 - 第2優先:関係各所への連絡
 - 救急車(119番)要請
 - 保護者への連絡
 - 管理者・関係機関への報告
 - 第3優先:記録と他の子どもへのケア
 - 客観的な事実の記録
 - 他の子どもの心のケア
-

【グループワーク】危険予知トレーニング(KYT)体験(20分)

以下のイラストを見て、グループでKYTの4ラウンド法を実践してみましょう。

[ここに、室内で数人の子どもが遊び、職員が一人いるイラストを挿入。イラストには、棚の上に不安定に置かれた物、床に転がったおもちゃ、コンセントにフォークを差し込もうとしている子など、複数の危険が描かれている]

1. 現状把握: これはどんな状況ですか？
 2. 危険のポイント探し: この中に潜んでいる危険を、できるだけたくさん見つけてください。
 3. 対策樹立: それぞれの危険に対して、どのような対策が考えられますか？
 4. 目標設定: この状況を防ぐために、私たちのチームが明日から実践する行動目標を一つ決めましょう。
-

【講師用原稿(スクリプト)】(想定時間:120分)

はじめに(10分)

皆さん、こんにちは。基礎研修第13回を始めます。本日のテーマは「安全管理とリスクマネジメント」です。

皆さんに質問です。子どもが、少し高さのある平均台を渡ろうとしています。皆さんには、どうしますか？

「危ないからやめなさい」と言う。「手を繋いであげる」「いつでも支えられるように、そばで見守る」。色々な関わりがありますよね。

「危ないからやめなさい」と言うのは、簡単です。しかし、それでは子どもがバランス感覚や達成感を学ぶ「挑戦」の機会を奪ってしまいます。

私たちの専門性とは、この「安全」と「挑戦」という、一見すると矛盾する二つを、高いレベルで両立させることにあります。今日は、そのための具体的な考え方と技術、「リスクマネジメント」について学んでいきましょう。

リスクマネジメントの基本サイクル(20分)

リスクマネジメントとは、事故が起きてから「すみません」と謝るためのものではありません。事故を未然に防ぐための、予測と準備のプロセスです。

お手元の資料にあるように、基本はこの4つのステップの繰り返しです。「危険を見つけ」「分析し」「対策を立て」「チームで共有する」。

ここで非常に重要なのが、全ての危険をゼロにすることが目的ではない、ということです。

例えば、ハサミ。これは指を切るリスクがあります。だからといって、施設から全てのハサミをなくしたらどうでしょう？ 子どもたちは、工作をしたり、紙を切るスキルを学んだりする機会を失います。

私たちの仕事は、「ハサミは危ないから使わせない」ではなく、「安全なハサミの使い方を教え、大人がそばで見守ることで、リスクを管理しながら、挑戦の機会を保障することです。

「排除すべきリスク」と「管理しながら許容すべきリスク」。この二つを見極める専門的な視点を、私たちは持つ必要があります。

事故の芽を摘む「ヒヤリハット報告」(30分)

では、どうすれば事故を未然に防げるのか。その最大のヒントが、皆さんの日常に転がっています。それが「ヒヤリハット」です。

この氷山の絵を見てください。これは「ハインリッヒの法則」として知られています。1件の重大な事故が海の上に見える氷山の一角だとすれば、その海面下には、29件の軽い事故と、300件ものヒヤリハットが隠れている、と言われています。

これは、何を意味しているか。

海の上に見える、起きてしまった重大事故を分析しても、もう手遅れです。私たちが注目すべきは、海面下にある、この300個の「事故の芽」なのです。

子どもが滑って転びそうになった。ドアに指を挟みそうになった。その一つひとつのヒヤリハットは、決して「失敗談」ではありません。「この場所には、こういう危険が隠れているよ」と教えてくれる、重大事故を防ぐための「未来からの警告」であり、「宝の山」なのです。

だからこそ、皆さんの職場の文化として、ヒヤリハットを報告した人に対して、決して「何やってるんだ」と責めてはいけません。「よくぞ報告してくれた！ありがとう！」と、その報告する勇気を称え、感謝する文化を作ることが、何よりも重要です。

特に注意すべきリスク:SIDS(乳幼児突然死症候群)の予防(15分)

ヒヤリハットという「事故の芽」を摘むことの大切さをお話しましたが、ここでは私たちが常に意識すべき、非常に重大なリスクである「SIDS」、乳幼児突然死症候群について具体的に学びます。

原因はまだ不明な点も多いですが、リスクを減らすためのポイントが分かっています。それが、「あおむけ寝」と「たばこ」という、特に重要な2つのポイントです。

そして、これらと合わせて施設として絶対に徹底しなければならないのが、睡眠中の呼吸チェックです。元気に見える子でも、睡眠中に突然、呼吸が止まってしまうことがある。その万が一に備え、私たちは5分、10分に一度、子どもの顔色や呼吸を必ず確認します。これは、子どもの命をお預かりする専門職としての、最も重い責任の一つです。

休憩(10分)

ここで10分間の休憩とします。

「危険を予知する目」を養う:危険予知トレーニング(KYT)(20分)

さて、休憩を終えて再開します。

ヒヤリハットは、起きてしまった出来事から学ぶ、いわば「事後学習」です。それに対して、これから体験していただくKYT(危険予知トレーニング)は、事故が起きる前に、積極的に危険を見つけていく「事前学習」です。

これは、私たちの「危険感受性」、つまり「危険を予知する目」を鍛えるための、非常に効果的なトレーニングです。

お手元の資料にも、具体例を載せました。椅子に登って棚の物を取ろうとしている子のイラストです。「椅子から落ちる」「物が落ちてくる」「床のおもちゃで滑る」といった危険を予測し、「そもそも高いところにおもちゃを置かない」「遊びの前に床を確認する」といった具体的な対策とチームの目標に繋げていく。これがKYTの流れです。

では、早速ですが、このKYTを皆さんに体験していただきたいと思います。

お手元の資料にあるグループワーク用のイラストを見てください。このイラストを題材に、グループで4つのラウンドを進めてください。時間は20分です。

(グループワーク後、発表とまとめ)

「棚の上の物が落ちてきそう」「床のおもちゃで滑る」「コンセント」…素晴らしいですね。たくさんの危険が見つかりました。このように、チームで話し合うことで、一人では気づかなかった危険が見えてきます。ぜひ、このKYTを、実際の職場の写真などを使って、定期的に実施してみてください。

万が一の時、冷静に行動するために:事故発生時の対応(10分)

さて、最後のテーマです。どれだけ万全の対策を講じても、事故の発生確率をゼロにすることはできません。万が一、事故が起きてしまった時に、子どもの被害を最小限に食い止めるために、私たちはどう行動すべきか。

一番の敵は「パニック」です。パニックに陥ると、人は正常な判断ができなくなります。

そのパニックを防ぐ唯一の方法は、事前に決められた対応フローを、全員が理解し、訓練しておくことです。

何よりも優先されるのは、「被災した子どもの安全確保と救護」です。保護者への連絡や記録は、その次です。

そして、重要なのが「応援要請と役割分担」。事故を発見した人は、一人で何とかしようとせず、まず

大声で他の職員を呼び、明確に役割を指示する。「〇〇先生は救急車！」「△△先生はAEDを持ってきて！」。この初期の数秒の動きが、結果を大きく左右します。

まとめ(5分)

皆さん、お疲れ様でした。本日は、安全管理とリスクマネジメントについて学びました。

今日の学びを、単なる「規則」や「マニュアル」として捉えないでください。

ヒヤリハット報告は、未来の子どもたちを守るための「思いやり」です。

KYTは、危険から目をそらさず、向き合う「勇気」です。

そして、事故発生時の対応は、子どもの命を救うための「プロとしての覚悟」です。

私たちの専門的なリスクマネジメントが、子どもたちが安心して「夢に挑戦できる」最高の舞台を作ります。明日から、ぜひ「安全の目」を一段階レベルアップさせて、療育に臨んでください。

本日はありがとうございました。